

甲奴郷土史だより

第 30 号

2023 年 8 月

甲奴郷土史
研究会発行

近隣の歴史を探る Ⅱ 神石高原町Ⅱ



鶴本節子

『星居山』をご存じだろうか? 「ほしいやま」ではなく、「ほしのこやま」と読む。

星居山は旧三和町と旧神石町の境に位置し、北は大山、南は四国連山を展望できる標高八三五mの山。広島県東部では最高峰である。

星居山には次のような不思議な言い伝えが残っている。

孝徳天皇の大化元(六四五)年、閏正月元旦の夕方、吉備国の山奥で天空が鳴動すると見る間に、奥山一体と麓を七里の広さにわたって真昼のようにパツと明るく照らした。しかし、この光も夜明け一日の出の頃には消え去った。

その翌日も同じような現象が起こったが、三日目には夜中になつても何事も起こらなかったで安心して、いまだ暗い明け方にまたまた天空の彼方に大鳴動が起こり、昼のように明るくなった。しかし、夜がほのぼのと明けるに従い平常通りになつて、その後は何も起こらなかった。ところが、五月一日から三日まで正月と同じような大

鳴動とともに、大光線が山内や山麓の七里四方を真昼のように照らす奇現象が起こった。里人たちは集まつて情報交換してみると、こうした不思議な現象が起こる地区は「阿知名山」であることが判った。その頃は諸国に不思議なことが起こると朝廷へ届け出なければならぬ決まりだったので、里人たちが一同が相談の結果、急いで朝廷に届け出た。

.....
ちょうどその頃、大和国高尾山に「小角行者」がおり、届け出を受けた朝廷は「小角行者」を呼び出し、至急吉備国阿知山の調査を命じた。命令を受けた「小角行者」は、四月三十日までに阿知山の麓に着き、五月一日山に登ると、その夕方から天空が鳴動して、山内と麓の七里四方を真昼のように明るく照らした。「小角行者」は、不思議な光に向かい、

『どうして不思議な現象が起こるのか。また光の本体は何者だろう』

と質問したところ、遙か天空に声があり、

『我は宵ノ明星なり。日本国中はもちろん、星の世界まで悪鬼、悪魔がはびこらず、人々が榮えていくように……と念願して、三個の明星が代わるがわる阿知山に天下つてくるのだ。明晩もまた来るだろう!』

と「小角行者」に一つの玉を与えて、天空の彼方に消え去った。

翌二日の夜半頃になると、またまた天空が鳴動して光り輝くと、今度は光が木の枝にかかったような形になつて止まった。……と見る間に光の本体は「小角行者」に玉一つ

を与えたうえ、

『国中の人々が榮えますように祈る！』
と宣言して天空の彼方に消え去った。

そうした不思議な現象をつぶさに見届けた「小角行者」は、阿知山を下り、奈良の都に帰って一部始終を孝徳天皇に報告し、光の本体からもらった【三つの玉】を差し出した。孝徳天皇はうやうやしくこれをいただき、その年の八月になると「小角行者」を伴って、孝徳天皇自ら阿知山麓に来て【仮ノ御所】を建てて滞在された。

九月一日いよいよ孝徳天皇も阿知山に登られ、【宵ノ明星】を待ち給うたところ、五月と同じように天空が鳴動して光明が下り、山内はもとより山麓七里四方の一带は真昼のようになり明るくなった。

小角の報告は聞いて知ってはいしたが、現実に見る不思議な現象に孝徳天皇はますます驚愕し、山上で礼拝の日を送り、二日目に山から下り、【宵ノ明星】から頂いた【三つの玉】に向かって祈り『願わくば、阿知山の峯に水を下さしめ給え！』と夜もすがら祈願あそばされ、三日目に山に登ってみると不思議や『コン』と清水が湧き流れていた。



*イメージ図

孝徳天皇は自ら体験した明星の靈驗奇譚に、それから

のちは夕方と夜中と明け方の三回は、必ず【三つの玉】を伏し拝み給うた。そして、山麓の仮御所に滞り在されたので、そこを【御所が原】と言い伝える。

孝徳天皇は日本三十三カ所の靈場になぞらえて、三十三カ所の家を造り、各地から参拝する人々が宿泊する宿とし、山頂には角木造りの神社を建て、銅葺きの御殿に【三つの玉】を納め『三玉神』と唱えた。
阿知山のことを『星居山』と命名された。

.....
このころ国々は乱れて、百鬼夜行の有様であつたが、いつとなしに平和な世となり、孝徳天皇のご心痛もなくなつた。

十月になると、孝徳天皇は奈良の都にお帰りになり、² 諸国に対し、一年に一度は星居山に参詣するよう、勧告のお触れを出し、天皇自身も政務の暇をみては度々参詣あそばした。

八度目に参詣されたとき、

三つ星人をめぐみに空はるゝ光を受けて生き立つ国々

星居山に身をおき年々に四方の本草に花咲くをみて

の和歌を残して、正月十三日崩御された。

その後歴代の天皇の信仰も厚く、聖武天皇は三度も参詣され、神亀三(七二六)年このとき参詣の時には、僧行

基を同伴せられたほどであった。

星居山由来記より

このような伝説が残る星居山は、古くから信仰の対象として崇敬されてきた。孝徳天皇や聖武天皇、行基も登詣したとされ、法道仙人 播磨書写山円教寺(現姫路市)の性空もこの山にとどまつたことがあるといい、平安時代初期から真言僧が住んでいたと伝えられる。

これらは伝説と思われるが、南北朝初期には、山頂に僧堂があつたことは、近江永源寺(現滋賀県神崎郡永源寺町)の僧寂室が登山して『遊星舉山僧舎』と題する詩を詠んでいることから知れる。

文明年中(一四六九〜八七)には、山腹に真言寺院が営まれていたと伝え、その後退転していたが、延宝年間(一六七三〜八一)に再び真言僧が山上に住むようになったという。「西備名区」は、

此山近郷の高山にて竜山、簸山に亜く。此峰より雲伯の山々眼下に見へ渡れり。嶺に堂宇あり。福一満虚空菩薩を安置す。正月十四日法式あり。貴賤群参して市をなせり。と記す。



性空上人



孝徳天皇

現在は星居山の麓は星居山森林公園となっており、キャンプ場やテニスコートなどがある。登山道も整備されており、森林公園からスタートするコースと、もう少し車で登ると野外トイレのある駐車場が見えてくる。そこから登るコースもある。

頂上には、宝篋印塔と展望台がある。展望台には、

孝徳天皇の御陵所であつた。宝篋印塔は性空上人の廟所として、寛弘二(一〇〇五)年に建立。高さ二・四mで、石造物として由緒あるものである。……

という説明板が設置してある。



宝篋印塔



小角行者



星居山

性空上人は、平安時代中期に活躍した天台宗の僧で、播磨書写山に入って修行し、円教寺を創建した。

三六歳で出家した後、西国各地で山岳信仰を行っていたので、この備後の星居山でも修行を行ったのだろう。

性空上人は寛弘四（一〇〇七）年に亡くなっているのですが、この宝篋印塔はその二年前に建立されたことになる。

孝徳天皇の御廟所と伝えられる星居寺がある。この寺は孝徳天皇の白雉元（六五〇）年勃願によって創建された霊跡といわれている。

頂上付近には『此丘尼庵跡』があり、五輪塔の風輪と思われる小さな丸い石と昭和の時代に建てられた石造物がある。西備名区や三和町誌には、尼寺があつたという記述はなかったが、山頂で静かに過ごした尼さんがおられたのであろう。

甲奴町近隣の町にも、このような伝説などが残っていると、ころがたくさんある。そういう不思議な・面白いお話を、少



👉 比丘尼庵跡



👉 星居寺

しずつご紹介できればと思っています。

今回は私の生まれ育った町にある、不思議な伝説をご紹介した。旧三和町阿下（あげ）には母方の祖母が住んでいたもので、なじみが深い。

阿下は、北を星居山、南を高丸山（七四七m）およびその支峰によって囲まれた地区。西南から北東に流れる阿下川沿いに集落が形成されている。

星居山への登山口なので、御所ヶ谷、坊主釜などのほか、山深いところだけに木地師（きじし*1）の居住跡を示す雉屋などの地名がみられる。

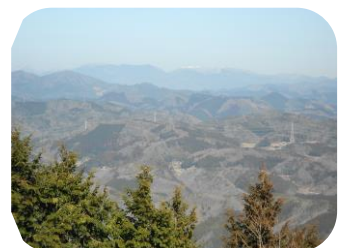
小さい頃、何気なく祖母が言っていた地名には、こんな意味があつたのだということがわかって、感慨深い。

新緑・紅葉など季節で楽しめる山なので、ちよつと足を伸ばしてみるのはどうだろう。

※用語解説※ ●木地師：ろくろを使って、椀や盆など木工加工品を作る職人



右の写真…山頂の展望台と宝篋印塔



右の写真…山頂からの眺め



右の写真…尼庵跡の石造物

【参考資料】

・三和町誌

・星居山由来記

・西備名区



昭和50年代の甲奴町

昭和50年代の甲奴町のある地区の写真です。ちょっと広範囲なので、難しいかもしれません…。*答えは最後に。



こちらも昭和50年代の甲奴町のある地区の写真です。よく見ると、わかりますよ。
*答えは最後に。

（株）菁文社さんが発行されていた郷土誌「げいびグラフ」から、甲奴町関連の資料で、掲載させていただいた「承を受けた記事」をご紹介します。
今回は懐かしい校舎をご紹介します。

【甲奴郡 小童小学校 私たちの学校】

昭和五十（一九七五）年第六号（株）菁文社「げいびグラフ」より



甲奴郡 小童小学校

私たちの学校

甲奴郡甲奴町立小童小学校

6 年 角 谷 正 美

はくたちの学校は、甲奴町立小童小学校といます。
この「小童」というのは、すさのおのみことが、この小童の里に来て、子どもたちがさわぐのを見て、「ひちぐるしい（さわがしいな）」と言ったので、「小童」と名づけられたのだそうです。

小童地区は毎年7月に、3日間祇園祭が行なわれます。上下町から太こをたたき、やかたをかついだ長い行列がきます。またたく間に、学校の運動場は自動車でいっぱいになります。1年間で一番にぎやかな行事なのです。

次に、学校行事についてお知らせします。

年々児童数が少くなるので、今年から全校誕生会をすることになりました。行事部が中心に計画をたてて、ゲームをしたり歌をうたったり、ダンスをしたりして、とても楽しいものです。誕生日の人は、先生が学校でとって下さったカラー写真をかくに入れて、記念としてもらうのです。

また、掃除も今年からは、1年生から6年生まで、12班にわけてやっています。高学年は低学年を指導しながらするのです。1年生も20分間の掃除時間を、休むことなくいっしょうけんめいしています。各学年でしていた時よりも学校がきれいになったようです。

また、今年から7月の下旬に、全校キャンプが県民の森であります。これはおとうさん、おかあさんが計画されているのですが、はくたちはとても楽しみにしています。

まだたくさん行事がありますが、このように、小童小学校では児童数が少なくなるので、全校で行事をすることがふえています。児童会では、「助け合いながら楽しい学校」にすることを目標に、今日もがんばっています。

懐かしい木造校舎の小童小学校。

昭和50年の記事ですが、この頃から児童数が減ってきていると書かれています。

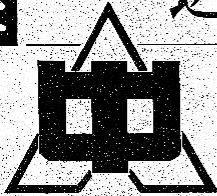
人数が少なくても、全校児童でゲームなどをする誕生日会を行ったり、掃除も1年生から6年生まで12班にわけて行ったり。『助け合いながら楽しい学校』にすることを目標に、今日もがんばっています。と言葉に、今の小童小学校につながっていく『力強さ』を感じました。



わが
母校

甲奴町 広定中学校

近藤 範二 小童公民館長



広定中学校全景、昭和26年9月（池田一登氏提供）

僅か13年で廃校となった広定中学校を今となっては知る人も少なくなった。辺りな山の中学校ではあったが、村民の城であり誇りであり、それを失うことに村人は猛反対した。

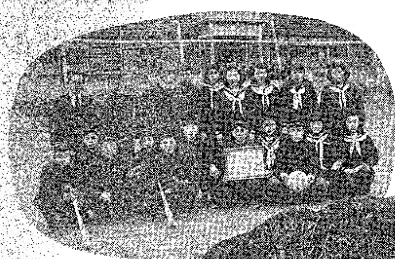
その哀しい顛末を一村人の記憶の中から綴ってみた。

昭和22年4月、新しい学制による新制広定中学校が発足した。村内の小童、宇賀両小学校の卒業生が入学してきた。そして民主、自由、平和を旗印に、新しい人間像を目指す新しい教育がこの草深い世羅郡の北辺に誕生したが、伝統は勿論校舎もない。同じ時期廃止された広定青年学校の古い小さな木造校舎に収容されたのだが、それでも生徒数だけは男女合わせて200名を超え、学級数6、現在の甲奴中学校のそれに匹敵していた。

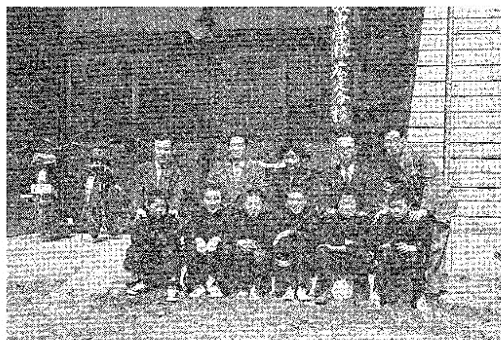
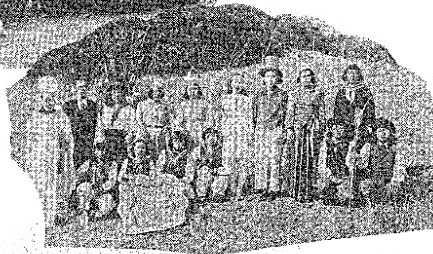
敗戦に打ちひしがれ、目標を失い、経済の復興はその兆しも見えない暗いあの頃の世相の中で、教育建設の槌音の高らかな響きを村民は一樣に微笑の中で聞いたものである。

しかしながら6・3制の新制中学校は、どこも同じ準備もなしの急速な発足で、校舎、教職員、教育課程、更に教科書から設備に至る万端未整備のまま、目標や掛け声の割には教育実績ははかばかしからず、全国的問題として小規模校の統合の方針が打ち出され、広定中学校も隣の甲奴郡甲奴村、上川村と共に、統合再発足の議が3ヶ村教育行政要路で起こったのが24年4月、翌5月末にはもう組合立甲奴中学校が発足というあわただしさ。ただ当時の状況として、本校の他に3ヶ分校は当分の間併置ということであったが、「完全統合と教育の振興」の

【わが母校 甲奴町広定中学校】近藤 範二（小童公民館長 当時）平成元（一九八九）年第五五号（株）青文社「げいびグラフ」より



▶ 分校になった頃の写真。
(大前トモエ氏提供)



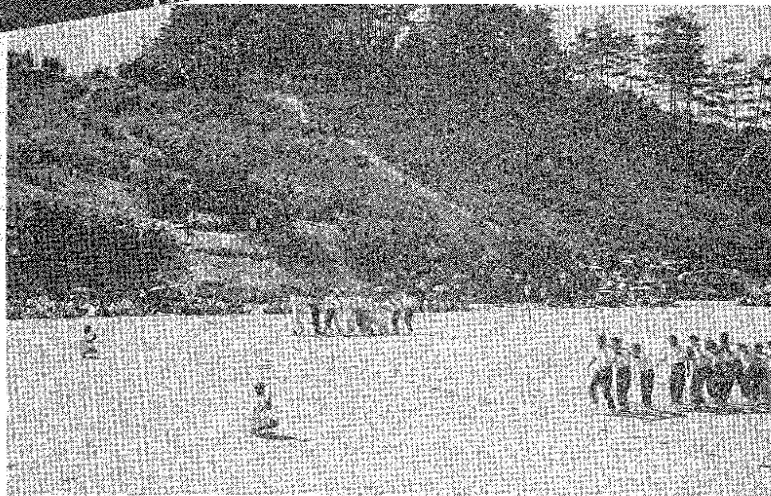
昭和27年3月卒業生、思い出の一コマ。
(大前トモエ氏提供)



▶ 昭和28年9月、運動会。
(池田一登氏提供)



▼ 現在はかつての校庭には草が茂り荒れ放題。



理想のもとに、27年3月末甲奴村に本校新校舎が落成した。

ところが我が世羅郡広定村では、中学校生徒の本校への吸収統合には反対の異議があり、28年4月頃抗争気運が頂点に達し、5月10日を期した分校廃止指令に広定分校PTAを中心に絶対反対運動が展開され、5月11日から生徒は1人も本校に登校せず同盟休校に突入、県下異例の紛争状態となった。

生徒達は本校への引き上げで教職員不在の分校に籠城し、村内の教職経験者が動員されてその指導のもとで自習を続け、あくまで本校登校拒否を貫き、父兄や村民もまた度々大会を催し、県庁へ藩旗陳情で座り込み、泥沼の様相が続いた。この異常事態に県当局も憂慮を深め、教育行政機関や県議会までが種々斡旋の労をとり、6月

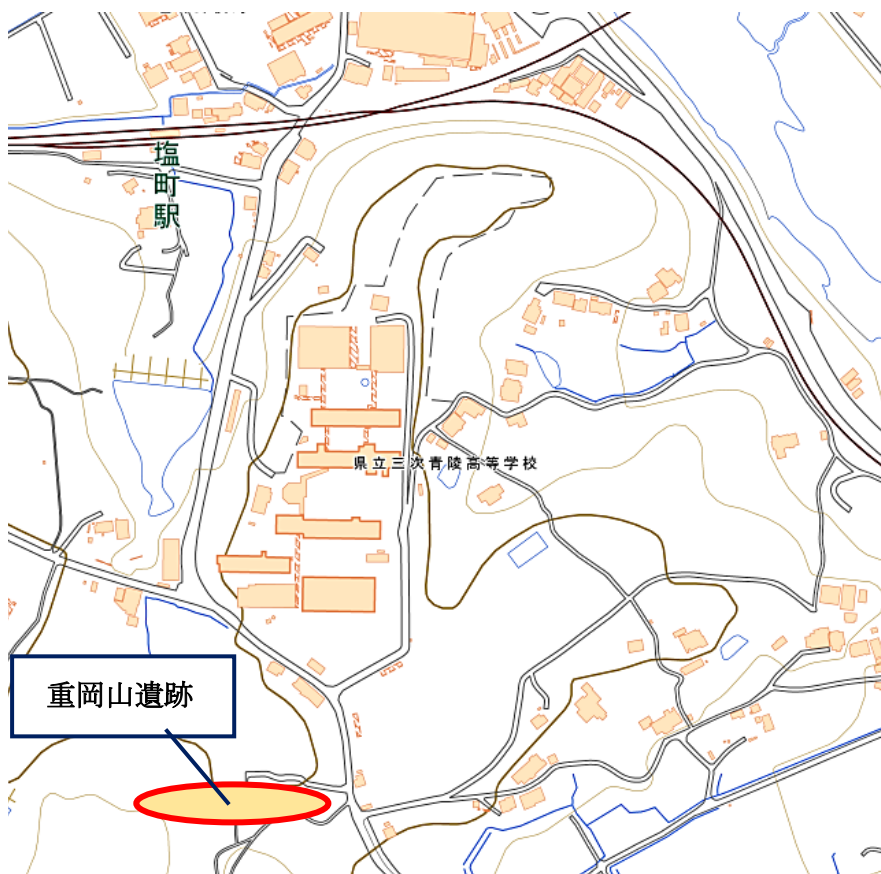
22日に到って一応広定分校再開指令が出され、教職員も分校に復帰、授業は再開されたが、これの基本的解決は町村合併（これも学校問題等を因として近傍に例を見ない紛糾の結果33年10月に完成）まで持ち越され、35年6月ようやく分校廃止、生徒職員本校復帰統合で結着を見た。

想えば運動会や学芸会その他村を挙げての催しに沸いた広定青年学校、広定中学校の校舎、校庭の面影は今跡形もなく、畜産農家の施設となり果て、当時を知る人語る人共に少ない。ただ倒れたままの校門石柱2本に往時を偲ぶ私も遠からず逝くだろう。統合反対運動の功罪は知らず、教育の有り様の変遷、地域住民の生き態の移り変わり興亡治乱は世の常態と諦観するのほかないのだろうか。

重岡山遺跡発掘調査現地説明会に参加して

二月二三日(祝日)に、三次市大田幸町にある『重岡遺跡』の発掘調査現地説明会に参加した。

三次市教育委員会は、昨年十一月より発掘調査を行ってきた。この重岡山遺跡は、弥生時代中期後半(今から



約二〇〇〇年前)と古墳時代後期(今から約一四〇〇年前)の遺構や遺物が見つかった。北調査区と南調査区の二つあり、今回実地見られたのは南調査区。

下の写真『竪穴建物3』

と、左の写真『土坑1』

はどちらも古墳時代

から古代の遺構である。

こちらからは須恵器の

破片やかまど跡、建物の

柱の穴などが発掘さ

れた。

その奥には弥生時代の

建物跡がある。竪穴

建物跡の周りには、柱

の穴があり、立てた柱



を、中心で合わせる『竪穴住居』に近いものよう。(図)

北東向きの緩やかな斜面に集落が築かれ、弥生時代の建物は上から見て円形、古墳時代の建物は上から見て長方形をしている。

須恵器・土師器・弥生土器などが見つかり、竪穴建物3からは、磨製石斧鉄滓が見つかっている。

弥生時代から古墳時代まで、五〇〇年の間があるそうであるが、この場所が生活しやすい場所だったのだろう。

【参考資料】・榊島田組 重岡山遺跡発掘調査現地説明会資料



竪穴住居の構造



季節のことば ≪七十二候≫

季節の春夏秋冬をまず二十四節季に分け、それをまた七十二候に分け、昔の人はそうやって四季を感じてその時々々に似合った生活をしてきました。

暑い夏でも季節は『秋』。秋のことばを紹介。

△寒蟬鳴 (ひぐらし なく) ≪ 八月十二日頃

『カナカナ』と甲高くひぐらしが啼き始める頃。日暮れに響く虫の声は、一服の清涼剤。

△蒙霧升降 (ふかき きり まとう) ≪

八月十七日頃



深い霧がまとわりつくように立ち込める頃。秋の「霧」に対して、春は「霞」と呼ぶ。

△天地始肅 (てんち はじめて さむし) ≪

八月二十八日頃

天地の暑さがようやくおさまりはじめ始める頃。



「肅」は縮む、しずまるという意味。

左の表のように、春夏秋冬と季節ごとに分かれている。

忙しい毎日ですが、少し手を休めて、季節の移ろいを感じてみませんか。

七十二候		明治11年(1878年)『懐中要便七十二候略』	
春		夏	
立春	東風解凍 黄鶯睨院 魚上氷	立夏	蛙始鳴 蚯蚓出 竹笋生
雨水	土脉潤起 霞始凝 草木萌動	小滿	蚕起食桑 紅花榮 麦秋至
啓蟄	蟄虫啓戸 桃始笑 菜虫化蝶	芒種	蟪蛄生 腐草為螢 梅子黃
春分	雀始巢 桜始開 雷乃發声	夏至	乃東枯 菖蒲華 半夏生
清明	玄鳥至 鴻雁北 虹始見	小暑	溫風至 蓮始開 鷹乃學習
穀雨	萌始生 霜止出苗 牡丹華	大暑	桐始結花 土潤溽暑 大雨時行
秋		冬	
立秋	涼風至 寒蟬鳴 蒙霧升降	立秋	山茶始開 地始凍 金盞香
処暑	綿柎開 天地始肅 禾乃登	白露	虹藏不見 朔風弘葉 橘始黃
白露	草露白 鶡鴒鳴 玄鳥去	大雪	閉塞成冬 熊蟄穴 鱖魚群
秋分	雷乃收声 蟄虫坏戸 水始涸	冬至	乃東生 麋角解 雪下出麦
寒露	鴻雁來 菊花開 蟋蟀在戸	小寒	芹乃榮 水泉動 雉始雊
霜降	霜始降 雲時施 楓薦黃	大寒	款冬華 水沢腹堅 鷄始乳

日本災害の歴史

東日本大震災から十二年。平成三十年災から五年経とうとしています。毎年日本のどこかで大雨・洪水、竜巻などの災害にみまわれています。

記録の残っている飛鳥時代より、日本は様々な災害にあつてることがわかります。『防災』『減災』と呼ばれている今だからこそ、昔起こった災害にも目を向けてみようと思います。

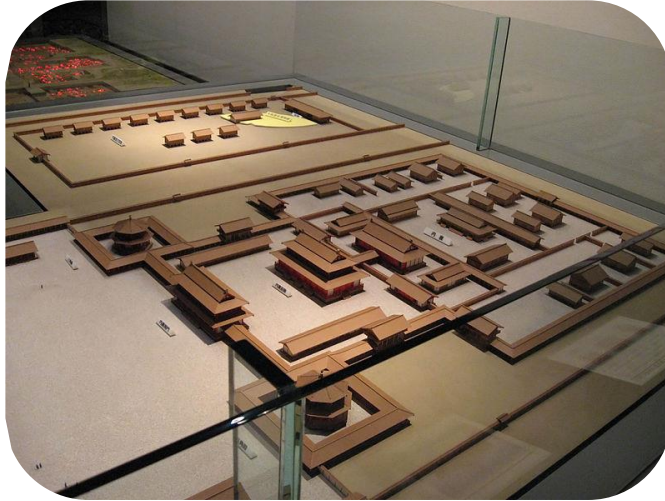
【白雉三（六五二）年難波の大洪水】

日本書紀巻二五・孝德天皇、夏四月丁未（四月二十日）に『自於此日初、連雨水至于九日、損壞宅屋傷害田苗、人及牛馬溺死者衆』とある。つまり、四月二十日（新暦五月二十七日）から九日間にわたって連日雨が降り、洪水によつて宅屋は損壊し、稲の田や苗は傷つけられた。人や牛馬の溺死した者は多い。とある。洪水の被害を述べた最初の記録といつてよいだろう。

当時、孝德天皇が宮殿を置いた難波長柄豊碕宮（なにわのながらのとよさきのみや）は、現在の大阪市中央区にあり、その北西に瀬戸内海を経由し、国内各地へ物資を運ぶ物流の拠点として難波の津があった。

その点から、この損傷した宅屋とは、農民の家だけでなく、難波の津の物流業者の倉庫や家、港湾関係者の家々

また長柄豊碕宮周辺の官人(役人)の家、役所の諸用品などを扱う店など、上町台地の高台にある宮殿や豪族の館を除けば、それらも損壊したのかもしれない。死亡者の多いもの農民だけでなく、これらの人々も犠牲になったのであろうか。この洪水は、古来から氾濫を繰り返す、淀川によるものであろう。



↓ 難波長柄豊碕宮の模型



*イメージ図



洪水だけでなく、平安時代にはマグニチュード7.4と推定される大地震で、京都は大被害にあった。特に京都白河あたりがひどかったようです。
今も昔も、日本はさまざまな災害に遭って来たのです。

甲奴の石造物紀行 Ⅱ 福田下 Ⅱ

福田から西谷へ行く道に、小さな石で作った祠があり、その中に馬頭観音・牛馬供養碑と地藏さんがおられる。俗名として原の薬師さんとも呼ばれている。きれいな花を供えてあり、近くの人が管理されているようだ。



「こ」はど「こ」でしょうの答えです。
昭和50年の場所は【品】と【塩貝】でした。

事務局より

- ・会員募集中です。ご紹介ください。
- ・会の運営や研修内容について、ご意見やご質問何でも結構です。でお聞かせください。
- ・昔の話や地区の行事など、ご寄稿・お聞かせください。
- ・古い写真や資料等がありましたら、お知らせください。
- ・「甲奴郷土史だより」へ登載していきます。
- ・出品物につきましては、責任を持って返却しますので、ご連絡をお願いいたします。

連絡先 鶴本 節子(カーターセンター)

☎〇八四七―六七―三五三五